館内で最も大きなスペースである「ウェストアトリエ」には蔡氏のシグニチャーである火薬を使った作品が展示されていた。常に世界を飛び回るジェットセッターであるふたりは、創作の姿勢など通じる点も多い。

West Atelier

現代美術家と建築家が叶えた究極のアトリエを訪問

蔡　國強

マンハッタンのイーストヴィレッジ地区にこのほど完成した蔡 國強のアトリエ。
1885年に建てられた古いビルを改築するにあたって彼が指名したのは、
今、NYで最も注目される建築家のひとり、OMAの重松象平だった。
現代美術と建築、ジャンルを超えて共鳴し合うふたりのアジア人的感性は
本邦初公開となる茶室など、空間の隅々にまでみなぎっていた。

photos : GION text : AKIKO ICHIKAWA

重松象平

上右　茶室横のデッドスペースをうまく活用して設置した手水鉢。上左　スライド式のドアには茶室ならではのにじり口も設けられている。下右　白を基調としたモダンなオフィス空間と、オリジナルのレンガ壁のハイブリッドなコントラストも特徴のひとつだ。下左 1階と地階を結ぶ階段は、もともとあったレストランが使っていたものをそのまま利用した。

Sliding Door

Wash Basin

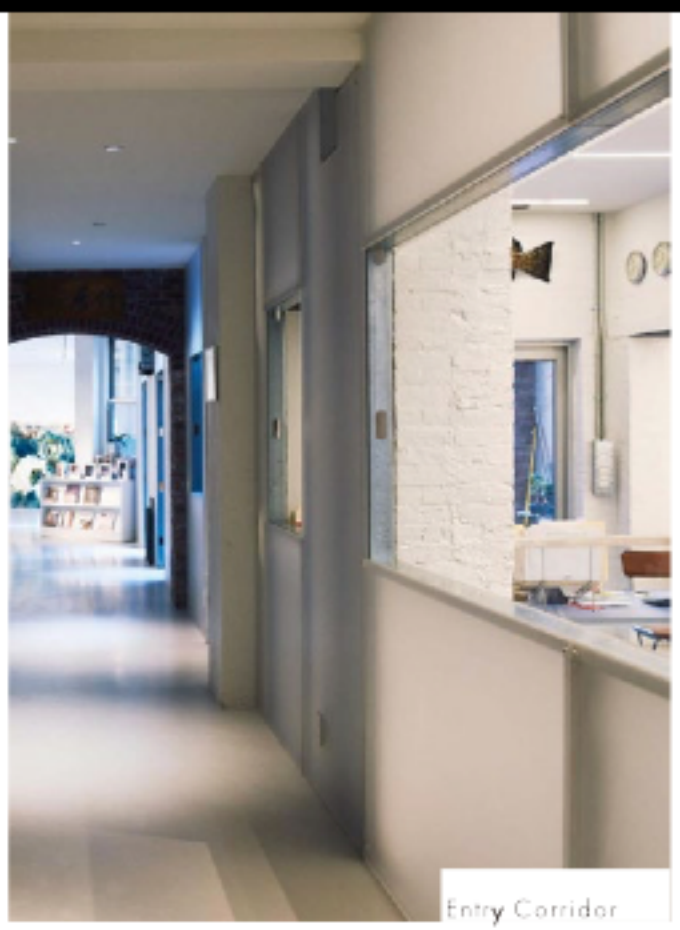
Atrium

進化するクラシック——。
OMAが提案する新しき"侘び寂び"

「自分だけでなくここを訪ねて来る人も、自由にここに座って静かな時間を持ってほしい。今、私たちは情報過多で考える力が足りなくなっているから」と蔡氏は語る。重松氏曰く「日本人の建築家として茶室はいつか手がけたいドリームジョブだった」。OMAバージョンの茶室はスリークでありながら奥には床の間や水屋などの機能もあり、茶道の基本をふまえた設計だ。中央の炉をクローズすると来客が宿泊できるなど、真に、もなる多目的なスペースである。天井の照明設備には竹製のシェードが設置される予定。

Tea Room

Media Room


Entry Corridor

Entrance

Banquet Room

上右　かつてジャン・ミッシェル・バスキアなども住んだ界隈の赤煉瓦のビル。上左 ストリートからアトリエまでを繋ぐ通路。風水的にも気の流れがいいそうだ。下　アトリエでは専属の中国人シェフが毎日昼食を用意し、スタッフ全員で食卓を囲む。蔡流の家族的コミュニティの在り方がこんな一場面にも表れている。

イーストヴィレッジ地区の赤いドアが目印の古いビル。ここの1階と地階に蔡國強氏のアトリエがある。アートギャラリーに属さないというユニークなスタンスをとる蔡氏にとって、ここは多機能性を有した拠点となっている。約3年の試行錯誤を経て、先頃ようやく完成したというスペースを訪ねた。

——重松さんにお仕事を依頼された理由は？

蔡　まずアジア的な美しさと繊細さを理解しながら、現代性も兼ね備えた資質を持っているから。彼とコラボレーションしてよかった点は私の作品や環境、気持ちについて徹底的に調査したうえでプレゼンテーションしてくれたことです。

重松　最初に生活パターンを見せてもらったんです。パーティや記者会見、食事会など、できるだけOMAのスタッフと共に参加し、どんな人が来るのか？　日常的な動線は？といった部分も細かく観察させてもらいました。

蔡　ここは僕の制作の場であり、オフィスでもあると同時にカクテルやディナーパーティができる社交の場としての機能も備えています。それだけでなく研究者が出入りできるライブラリーもありますね。

重松　NYにあったほかのアーティストのアトリエについても研究を重ねました。例えばドナルド・ジャッドの規律に満ちたアトリエ、ルイーズ・ブルジョワのインティメイトなテーブルのある空間、そしてアンディ・ウォーホルの超社交的なファクトリー。人それぞれいろいろなスタイルがありますが、蔡さんの場合はこの場所自体がコミュニティの拠点で、多様なアクティビティが自然発生している。それを建築でどう表現していくのか、そこがスタートライ

「木には魂が宿っている。
だからこの場所はいいツボなんです。
いい家には必ずいいツボがある。
落ち着くんです」

Cai Guo-Qiang
蔡 國強

中国福建省出身。1986〜'95年までは日本で創作活動を行い、その後NYに拠点を移す。世界の主要美術館でも個展、回顧展を行い、2008年には北京オリンピックの開・閉会式で視覚特効芸術監督も務めた。今、最も活躍中の現代美術家のひとり。

「大きな木のテーブルを中心にした
メディアルームは、
ミーティングや晩餐会はもちろん
自由な発想で多目的に使われています」

Shohei Shigematsu
重松象平

福岡県出身。1998年に国際的建築事務所OMAに入所し、2006年NY事務所設立を機にディレクターとしてNYに移住。'08年からはパートナーとして世界各地の美術館や住居施設、都市開発などのプロジェクトに従事。ハーバード大では教壇にも立つ。

約5mの天板はオレゴンで切り出された米松の一枚板。いつもここに座っているほど蔡氏のお気に入りの場所だ。政財界の重鎮からセレブリティまでがここを訪れ、居心地がよく長居するゲストも多い。最近はフランソワ・ピノーと3時間以上も話し込んだとか。

ンとなりました。

——設計の際に最も大切にされた点は？

重松　これだけ多様な機能を詰め込むとなると、各機能を個別に隔離しがちになりますが、逆に全体が繋がっている感じを出すことですね。これは蔡さんが作品を制作する過程で地元のコミュニティの人々を巻き込んでいく、というような民主的な姿勢にも通じているかもしれません。今、ここに座っていても上のフロアにいるスタッフの様子が感じられたり、キッチンでランチを作っている匂いが漂ってきたり。閉鎖感はなく開放的で透明性がある。

——ここはもともとは小学校だったそうですね。

蔡　そう。この石造りの古い壁やドア、階段など、以前より建物が備えていた美しさも活かしながら改装してもらいました。

——いっぽうでレジン（樹脂）の壁は近未来的な印象です。

重松　NYの素晴らしいところは古いものを残すところ。何かを残すのはコミットメントであって、それが重なって新しく作った建築には出せない味が出てくる。そういうことを蔡さんもよく理解されていて、僕らもなるべく残す工夫をしました。

蔡　私は彼の仕事は大好きだけど、

下 ライブラリーには蔡氏の作品集がすべて揃う。最近もビルバオグッゲンハイム美術館のキュレーターが論文執筆のために連日通っていた。窓辺にはデイベッドやベンチが設置されている。右　ライブラリー内に設置されたペリスコープ（潜望鏡）。地上の様子が見え、地下スペースへの採光装置としても機能。

Library

地階のライブラリースペースに
レジン製のブックシェルフが光を導く

ブラダみたいに高級になりすぎると照れちゃう、お洒落すぎちゃうのもね（笑）。このメタルスタッドは美術館でも壁を立てるときによく使う手法なんです。

重松　アートと建築が結びつく接点みたいな部分。商業空間とは違うアーティストらしいオーセンティックな表現も必要だと思いました。これは至極典型的な作りだからこそ逆に装飾性が排除され、新鮮なものになったと思います。

――茶室を作った理由は？

蔡　今の時代は思想が足りない。私はいつも飛行機を乗り継いで移動しています。だからゆっくり座って落ち着く場所が欲しかった。茶室の中では所属や階級を超えて誰もがただの生命体になります。時間や本質と対話する、というコンセプトを取り込みたかったんです。

重松　この茶室はもとより、蔡さんと仕事をすることによって、自分の中のアジア人的な意識が喚起されました。アジア人だから共有できる季節感やアイデンティティ、考え方などを改めて意識し、国際的な舞台でどう建築に取り組むか、という課題を提示していただいたことには感謝しています。

――ふたりのクリエーションに共通点はありますか？

蔡　〝かっこいいもの〟が好きなところかな。そして私のアートはコントロールできない野蛮さもあるけれど、同時に詩的な美しさもあると思う。それは彼の建築にもいえること。

重松　蔡さんの作品にはストーリー性と原始的な美意識が同居している。僕の建築もその根底にはいつもストーリー性があります。でもいつか蔡さんのように、どの文化でも共有可能な温かさと、強烈なオリジナリティが共存している建築を作りたいですね。